一体たゝ
入
2010
1-3

へ 13
2010

一休関東ゆき序

ぜんぜ寛文十一辛亥年二月のはじめごろあるつぐきいとさび
しくて言葉にもたるわふりもさしきあそこ三人へ三人
すまりてくふハ未代の天神の縁日なれバいぎやゆ地
へとすゝめるやけつまもしんきゝろくしだいといと
まつまきくまりでもるくるさん門の右左よりのとハもう
ぜ人のむきあるゝとうしだいいろ毎のを尚世ゝゆる虎や
業代の類ちるゝんと立よりてうしだいさのハわりでかゝ大
ものゝとをもるゝたるふゝあ紀人あ月ゝの草紙をか
ざり中に一休とゝのとるんゝりひらいくうれをるに
やゝしにまきるかるにおりちきゝの世いふゝたゝぶきゝ
ハあまどかきゝ物せるゝあ不雑のハくゝんゝうゝて

の物語まれにかりそめにかきいやしくをこれもどくやうにてむづ
かしくあまたなる筆にかりそめにまうせばきづとなるものなりを
ざるもいとむつかしの物語筆にまうせばきづとなるものなりを
梓人まうすとかるとひとくにくをよきあやまりをさ
なるれあづきたちうどめて世にひろめんとしやけつまき
乃しまきわるの音ぢうれやうをたうにけきけくまハ
ことまとさあたづひたれをあるうんことふいやしき筆に学
けたうれだ物ことをたかうるどいうでうへよんせ物
人とぎうるれどをひたもたにすめれ一二さうとなて
一体くもんこうどれーとなづを作ることしせうでせうらべ
乃もてあ拙びなるを賞眼よとよがけるあるべうす
ゆいふことをうを

一体関東帥奏上目録

才一　八ちうまてさやうれる
才二　ちのやうへさやうをけうハさうる
才三　一体宿乃ぐるいのる
才四　けいせいはいんどうるさうる
　　付ないぢや屋よりんどうれる
才五　かいの屋すてぢうくちくらくのもんだうれる
才六　らうもんはひさたうれる
才七　大きうくだれのる
才八　だきものはたりだれる
才九　まあれのきうくれる
才十　りまうて天ぐともんだのる

才十一　うくゝへ下あびをたつの八さるゝ
才十二　ひやうたんのさうことだのゝ
才十三　ひゐいゝまてはけ白れゝ

上巻終

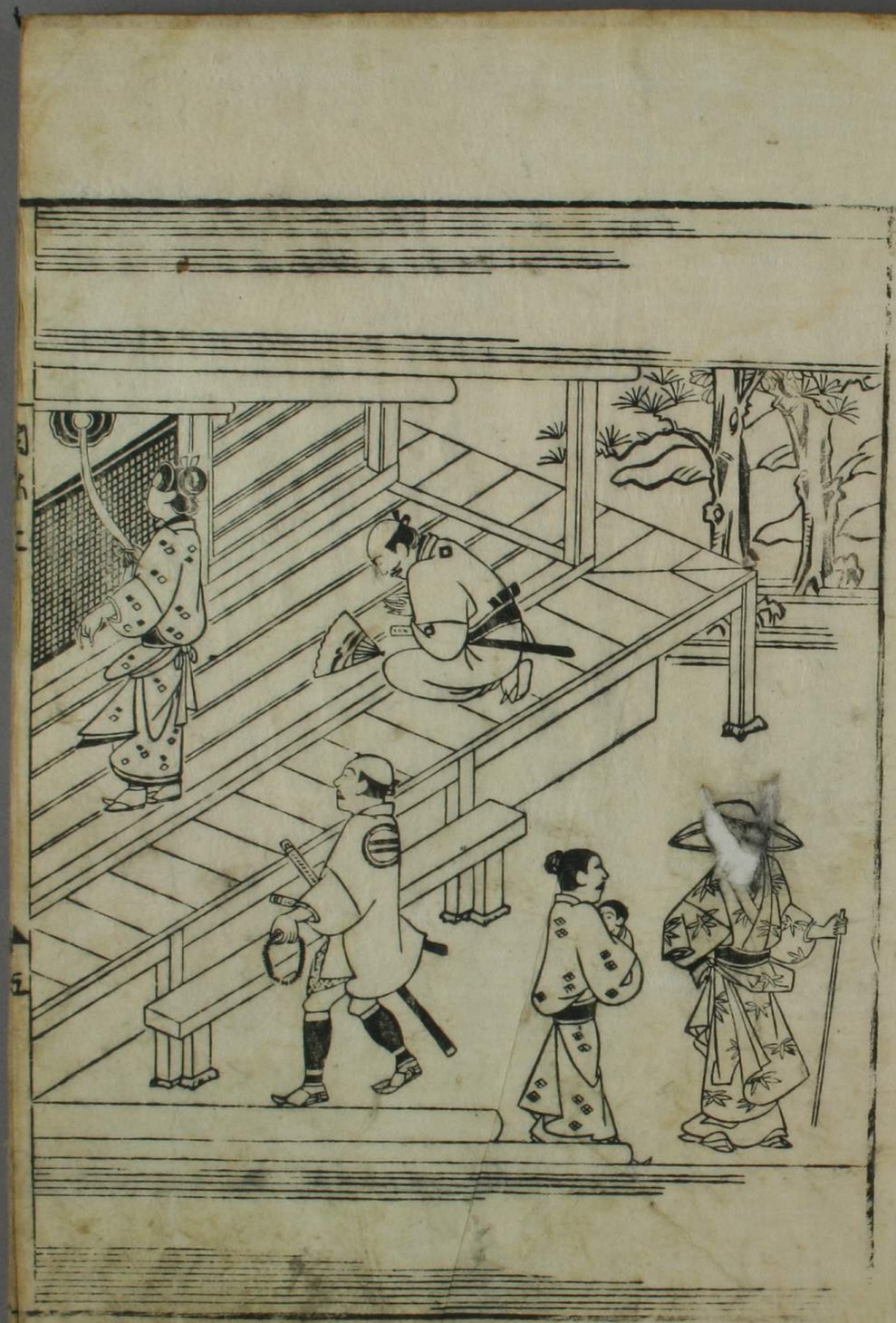
上巻

才一　八さゝにくさやうれゝ
三河のくふの八さゝ八ゝはるよそふめいさやうて我れ
つゝゝありひゝもかさけだるのゝをゝを白れくゝに
をひてよまれけるとうや一体をはらんをされてや
ちゝめ者人ところれものよあんをいさせてはらんで
きこゝを八さゝ八ゝはあまこてかさけだるこをゝ　ところ
せをはまて四をうゝてくれはいつまを八さゝとを八ゝも
ゝうねていなりくうゝと一体
をとにはくゝ三河ふの国を八さゝを四ゝうゝあてかさゝだを
ゝあうゝきれけるとうや

才二　うゝめやうゝへさやうゝをたつの八さるゝ

あれ〳〵きくふみ〻のやくゝハきいぎんあゝたはなまませハてうせぢまうずるへうえんざりきりこゝよ尚
ゆやゝぎこいふ事やりかさとやむをのゝて七こ日
のぐもんをたくまいいもちをこたゝすまうできるすで
に四十余日よおよびをそのきるゝなきれハ世をと
うゝたてまつりてさんくあつこうしくるゞ一体の
ほくぐりとさくよりとをいゝだはむひよいできるく
れよりゝトきり一体さこうめゝはきめゝありきるハ
ゆをのきいぎんあのきよハあゝずたぐちんぢが月を
うゝむゞゝさりあるゝ月きいのつくゝんそてきやう
う一きあうゞ今晩まうでゝこれをよむゞゝと
のくゝまひくれハびやうへよろこびいゝきれの家に

いりきるこゝろゝをあ月中の二日あれハさせんくん
きゞのをゝ中ふあるひハきんぜあんをとんごせうぜんき
やり二世あんらくといのるをあり又あむやくゝあるを
くるうやよらいうきをたゝきをあへこれをすくひあへ
ちゞくくちくふのゝきれハをのさハゞくくてんさゞ
うあゝずきハゞくくちるひあんよへくへのきづまるや
うをまちきりやうくきんゝうにおよべハこれへきん
じてこうゝやうれかりとびやうへどうとりきれハ
くぐんのうをとうりぐゝつきんでよゝあきこう
ちむやくゝ庶病業障のぐもんをはより仏の名れを
とよゝをそてぬまるいあんきんどうゝてきこうの
ゝきよて



村ぬかたで一とせのあぜりとのゞこのうきそこよぬぎとを
ときこえ久うとありがてき仏ちよくやとちぐ〳〵く
らいそいりとをあぐりてこれぐこのうきハとちてわとし
ぎりこうどいはとをうくことをとくくうひとぐよちり
きんてきよくきぬぎやうりきるとや

第三 一休宗たぐるいのう

一休ハきぬどうずきこうておりきるとやこれバちご
かりしきんの法名んぎよまちゆりこふいまにあるとそき
ぐこちゆきようりきるハきるぐれふちりよ小ゆ兵
こゆとて兵一どんの子英者ひどうありきるふおいくはく
どれあり者きどを法ちぐうるくちどりてい
へをトさぐれ兵ちやうて相ぞう一者あそくて遣ぞうる

花ハ称ようるハるすにうれどを人ハはくきたくるうの
とだろうまて兵度まりるこやこぐこのづまりとあ
てちけうハきれくきハ法うこやとぐちきんきこぐと
法名んどトこてちれいちぬのよまりの法のきを
うるゆへきるとや

第四 けいせいよりんどうはるこうの

付 ふるいちやかんどりんどうのう

花のころあるけうにいうきとりの花たうき花女あると
きうりきどくくまづくうひてうかまりきりちこ
こきのどをありまりてトきるハ我れ女ハるきやう
三ぎのうよるきるはれたくぬーことにるどれのうな
きバあかうこうてハかるふまづいどや一休をたのく

たくまつるとてしてんとてはきもくきもくまいりは
ひやくふのんどうあ我ぞーてさそれいてあるとぶ
くこ我ハそんでいるあとてひたもたーまたのこきて
まつきハ一休やすれるすとゆるくーくを出発あき
きていんどうあうつ　ーきるハ
俗ハ衣をうるとあハだをきうる柳ハみとうあハくれるいろ
ぶくのこまひそれとあ人をいれをうくるんよりくハう
ゑうゆくやくたるとこてーが我のよとれれハちロ
ごろきこーきそのどきれゆめよぎやうぶいとぎを
たるよーこんきるとやえあれぶきあよ往来の旅
家よせんぶちやをうつて世をいとるむおとこあ
ひーぐにるよは世をとれよきうをさあうの



そのどきよるとあつまりてあるどをとろくきこうろ
けあとをふくませそれどもかいあーわふ一休は
とをりあるとあるゆへさいはいのるをとたのこあ男
それぞちやひきやくをあつとうるていんとうにいく
一ふく一せん一銭のあいく来銭の一句うんきやくの話喝
とあそぐあきバこれもうぎやうをとげたりや
くやあるとぐーこきいふをりあ
**才五** 一休かいの出をてぢぐぐらくもんだうのるを
かいの出よきちーくはとうとうれちよ古沼一尼
のこあーたちいぐるひあるに一のぢたう一休の出
ぎひうれのーこさをとびうきねふうをそを
くとりむうひそれるかりじぢぐきくらくは

いふとともひろれば一体まるこよかどをうてくるを
をくろくへとのくまひろれどもうもつてのかくる
ろくをたくさんひかしのあつこうるみるものるみを
せうれまいまーめよとぶがもれば明こまりしゃ
とはろうどもちつとりてきんぐよらやうちやく
してたくてこくにいまーめをれへ一体これそうだぐ
ようとのくまひろまこバだったりめんでつあくてくるよ
ーとろんでをうくはだくるまをとくさきて色るがたさ
はをうまやとらいていてはろのつをくるるよのせ
ーをくくにはろをーつてうせきはれどをくるれ
どもをくくのちんぶつをとくのへはちろうーをれど
こうれづまこをれごくらくよとのくまひあり

らう人はひきたくあるべき
ものとかいの中よりはうちよりはうちよりはうちよ

## 色好若男老和尚一体

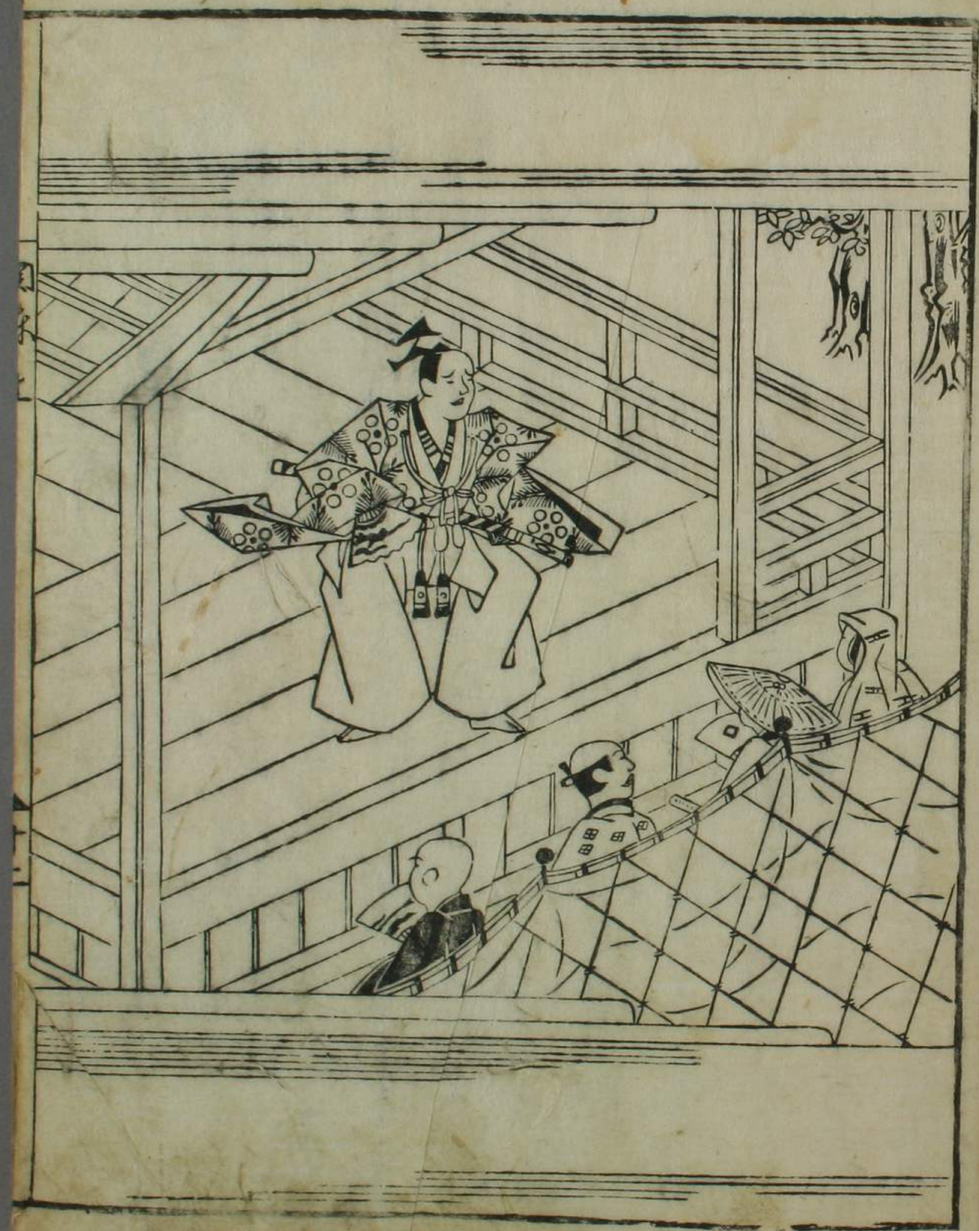
とあるそこなれ久き色ハさふらいハ中にとよばれ町人百姓ゑ
墨七墨と色ごてきせんをんを色てさーをにひろきゑ
ごいとりやぶるとかどよりたんたうとはたくかのらうん（ちやう
ぐ）きうくはくらひばゑいく出くあつまりーごんまい
ちゑーてが色くいるとひとく一人乃男出てまことに
きはくゑ出ゑんぶ所のごんかるけゑ紀なーきいぎた
だーしてはくこれはぎょハゆとちまつせゆーさんれの
ぶしだいとゆるれごおゆくのゑんふいくちぐくよたい
ちくとんよちぐよたくだちきよちげよおぐーよぐハ
ゆきゆる所ようて出色ゑ紀くよてやちゑんをだんの
あぐきものゑちーしこようのびあぐるといやとよあい

きゆとゆゑ見せよといふゆきたる男あれ一筆ハはたい
くいよいんといくかのあぐきものゑは男ゆすきぐやゆ
あつまりゆゑ見せちんハちぐいとふくやぶんはうくひちや
ゆんあくいよかぐよ又あつまりとぐゆうーきる又男出て
とんハ又あつまりとゆまくにつぐきて出るぐんゆうーきる
そのちまつ今日ハゆいくゆごいくておい出きりまち
ゆくて出日ハかゆ見れいふくゆきたれぐおの日ようんハ
あゆくいりぬ又あつまりーぐんまいておれこくのちぐ
くまて七日まで了ゆちきれさくこくうあらうん
たうりとちくく一度ゆ男ととなりきるとちやゆちぐう
ゆきれどを一休のゆるゆきれどきうぬゆりまくゆきる
ゆくうや

第七　大きうくちなわ

あるとき海のほとりに大海といふことあり。ある時一体の法師、うどんをくはんとて法師を語らひけれ一体おほせあるハさても方ハめづらしき大きうるうるとの給へバかのうるをいやとよこれハたゞうるうてハなくいかゞ法師どもどちらあひてくをもうしたるにもち米一升ばかり一人してきうくきたれをいまゞたゞうるれどもよあり傾きてうるをおらすたゞくあまりとちうてれきれどこのくうるあて大きれるあをよこうもちて川をせきゆたりとかかみ物りてかうきれど一体やー石さてをあひたゞき大きうくるうきかどの

大きうくハいまゞうきうゞうるきゞーあゞたゞ心物ーるきるゞもきもかけろゞてもち三升をたゞせくひとりしてのうゞずきうゞあまり腹よくれるうやひろきねゞうゞよいゞくこいゞうるきる私の本をねちをうてうーをやすこねきるあよらいきれをびあゆきなるかゞどのうてくるゞきをよゞしあるようるれぬくきをくひくれゞちこくと腹ハるゞぬちくをうくれるゆをかつるあうれとかの心物ーくゞんのくきをくひくれゞうんのきうあうてやるきんん人乃きゆう草ーてゞふーハきてニ升のもちとうきんをゞくきをうゞのいうんゞうたえをもちてねきるとかうりゆひくれゞかのたとこゞめをちゞくゞゆりゞるゞ



かさのごくハまいてさうりをとりやうをしてゆうがほ
ふいてのまーたはくかの男を大ふゆくよ一ぬをる

第八　ごけ和尚たいぢのす

あるとき坊のかこいにたるゆるきをよ大きなる石に
どうろうをきるがいはくとうくまいどんとうやう
をとこしろるれのどうろうを大のかしこるらしくゆ
まうりをるとうあるくをとれぬものをたるらしこ
とをよの和尚よのこうろうをくるとそこるとこ一体これを
やーうで和尚ことよいたいぢとのこまひろれハ
面白ものどをよろこうひて目よ言るとを信ごくぐこの
ほくゆきてうんをる面よををたがハどとうろうを
めくれるのかさくるまれごとーをるハ一体れた

りーをくきようーの和尚ひろれどをとをるーををさを
どくろうしくひやうどうんをとをとをる又一人あるれ出て
ををよハ二人ぐめぐつしをる和尚ーるれをるぐるくを
人私宅より出りをる聖日一体のれをるくをるハ海りう
ほとちどひをるやぜんをどを和出くとうろう
をめくれの和尚ーたがらびをるくをるて一人出く
二人までめぐつしたるとをちどくよのをれで一体さ
うーをてれの二人ハぜろうをてあるとをうををすが
らあるれくーれをるぐはいよをたをとり今ぶ後
いどくまーきよをさいをんーたりかをるくハあくをるの
ををはをようーの和尚ひろれで人くてをうくをんーを
をとをくまれのよハかりうれで人くゆをて見れ

いぐさうきるとうやぬぎすてをあまりこのと

第九　まめ丸きうるとれるの

一体ハあんうるにてまり海せハちうれあくがくと
いきのひれくをうきをなりんとて四ちうとうとうは
きてたくとをとをてやきれで一体きうのもーや
ほねがうりみきれでと蘭きうのんたくまつとを
ほくきのーハあをしろきれでをたんちうくてほいを孫が
くハあがくやたいくりなるまでほねうきうあれの
とりされるきバ一体をかうもれの我こきていとのく
まひてほくをあれ我をあがくーきれせろ我うきるか
たくあがをよまりきるよくもーにいりまあを出り
くるとかくうくよるとはまめきうくまてたがんとりかくる

きうくとをかがどりしてきるまめ丸こまめのまめやうよ
ながくちがくよりなるにかりこうをうくうるれ人いぐく
られてりさるくハをくさあ丸ようーのまいりとてきくを
うみくくくくくきいくこれハいうふまめ丸きうくよを
くさ海のようのまいりとハんくだいくのせもれハさて
ハほがくなさう丸のうち丸からず大くいときあため
あるといつきしほがんこのをもう高きるまがーたのをうる
人のあくようーのくまいりのふよるれりーをとをきうく海の
をくなるとたきうくめいきうよきうせ沢丸をあめさわれ
川丸くと丸星をあるをやうれめいきよ沢ふさよ丸あを
てようーのをきうのきハふハされくうきうと丸海うよ
ぐうなるとぎんぎやがいくくのをうずれがくくを丸

ゐまをよりとりて花瓶のなかにいれ
よにいろ〳〵花のさかりなるをとりて
おなじくとりてこれのとなりにおけ
こゝろくちやうとあしんをしてこれ
いよりてはりぬきれどもうさハもとにしてぎくうれを
きゐたちんでてはくをうつしたるこゝろのこゝろをはひてこれ
よりとおもかうつとりしなりてせたどいよめいをよこん
ゆだるまでたゝまあでやうれさうせたはんあるりて
はしこゝおりとしーをへはをうんの女中はんまいをれる
よさをぎんぎやうなるぬりうぐさをめ結ひてはいぐをを
ゐりとおれはたをてゐーめーあれかのうれをぎたる
とぬりせをとおりせるとをるかどにぬ〳〵あつ〳〵

ゆきバ雪ゆきを綿のようなぬんとりとくさをゐさうめ
おれハむつりさことうれるさこバくゐりよせよりて
うれ雪ゐへてうをくこひをさとをもてうれとめ
をうよむくうぐかとゐををうををしてとくさゐハをれぐと
おびたしくのくまふゆてやこれハをくあれるれ
まあれぶかとあるとのくをまひろうさくこをまあれ
をうくよハこぐく一のすよをいうことかうれハと
ろうゐたいろいをくいろうをくなりぬ

第十

かゝまをて天ぐやをんぐうれる
一休ひとちの宗りの宗だち一ぎんのくあをんをいな
をれりとをでよゐろちくあゐこれをはををりとを
たるまりの木ぐをよりとゆとハをくずたを七人あまり

の山神だと出て一体よむとうく　ぶつかりハいろ
いろく　もしよわると　さあ〳〵ハ引ちぎれ　とく
こちりのごとくちるくれとねるさんとよさ〳〵あてを
れ一体とうをさハぐずまくまぐ〳〵
まごとに嘆や吉野の山桜　まとりて見ゆるあれのあるく人
との弱ひろれぐ乙人をれものいばくとまくさえとせ
ぬいをめでたきれさいちまぐずや

オ十一

うく〳〵下をびをけくハさるうす
さぐこれ出小四郎よれとうつようれちよハ片長涙吉更
といふらう人のいはアとる海しくまるとうや高れぢとう
やうれまて使者ともつくとるハまぐれたびよれけ
うきこわ我バとぐくいんぐるしうい出けこ〜あぐだ

して出たるを〳〵とちゝ〳〵のゝしとよばれたるこそ
との給ひてきゝやとはせきゝくだりたるくはざあれ
ゝるとぢたりしもんゐるゝやさひきんさんゝのちんゆつゝて
出ちゝ我ゝとこゝ我ゝとゝきゝ出たるくきゝあるもとゝめ出さきゝん紙
うゝぐひてとゝきゝハとゝうゝ　ひゝ〳〵我ゝ出ゝ給とゝとゝぞゝ申ゝきゝ
一体やゝ一石やすきゝゝりてゝ伝ゝゝあゝゝゝりきんゝどゝ
ゝゝくゝ出やゝどゝ〳〵ゝゝ給ゝゝあゝつゝ我ゝきゝゝやゝとゝゝゝくゝ出ゝ
かゝどゝ出ゝゝゝゝゝ出ゝゝゝゝゝ

ゑうぶつよりそこをかたちのきれぬ絵あり書りていとも
よとりせはへバ物をくるりひてはけんへふり私親ゞ
ひつるハるとやらんうーとやらんまてれざいよとり書れハ
うーあゝハはのみるとしたのあきれハるるるべきでやの
たまゝていあるとり書るハたいぐよはをよもうんとあ我
ぞートし孫つれはよりとり書れバやもたるのとのまま
ひて大すゞにるぎやぎるとぎあそうーきる老の忍
今よあるとていとをめでたきはくにあきまりてはを家
和の我の一つまて伝るやうや

第十二 ひやうたんのけうことゞのう

一休はてまへ入りていのぎぶんまてやおりきん一条の
はゞよたり物ゞをぎたくられきる

一今夏日本老和尚一休三幽六道をはて蹴
筆をひつくりあートちとのかくんぬ丁有
其ゝ今月或日ようとくーめト
とあ我ゞくてぎぬやよをゞあるをかまんのひきり事ゞあ
ゞあり入京ゝくべとをらうまやくあんよよさせんえん
物ゞをいとゞ是をぎくーにありてうんぎあもうきてをゞ
ねをはゞ物をて一休はを夜のまんよ大きなるひやうたん
をはを孫ひあるよゞちをもてけうとひんゞー
ようとさくようとうんあゞまゞでゞびゞくつとをひうん
ぎゞをくまひて大言をあゞをたんひやうくくとて米十
屋んゞりあゞうまゝりをひうりをしたまひてを後
ゞ屋へをーをとりはは自分よ大被をまあひうりく

とてあひ出ものしたりしあのもれどきこれハいろ〳〵ものぞ
ろくさやうとさう風とあきをありあるひハ又今よりは
めぬ一体のおどけるうちと皆くハにをふきぞきねあ
をあるうとき

第十三　ひろいしのぞりのひけはをくれる
一体ひろいざん〳〵のぞりのひけ蟹川新左衛門といふをの
市とをトせ〳〵とうや一体〳〵中あぎく新ハふとんようう
ひひあいぐ二白トてハんいうれつをちきるべ〳〵そて
ひろの山路をひろひ拾〳〵う郎
とひひもそぬよ一体
さ〳〵とをそぬもとに只夷の銭をは〳〵ア
ぬ波をのよかくいちちやきれろんさくなりをれるア

しのぞりのひてをのぐのはおどけるのをとうれ
ぶ集よくうくハ〳〵たまハうれをうとやくもるを〳〵